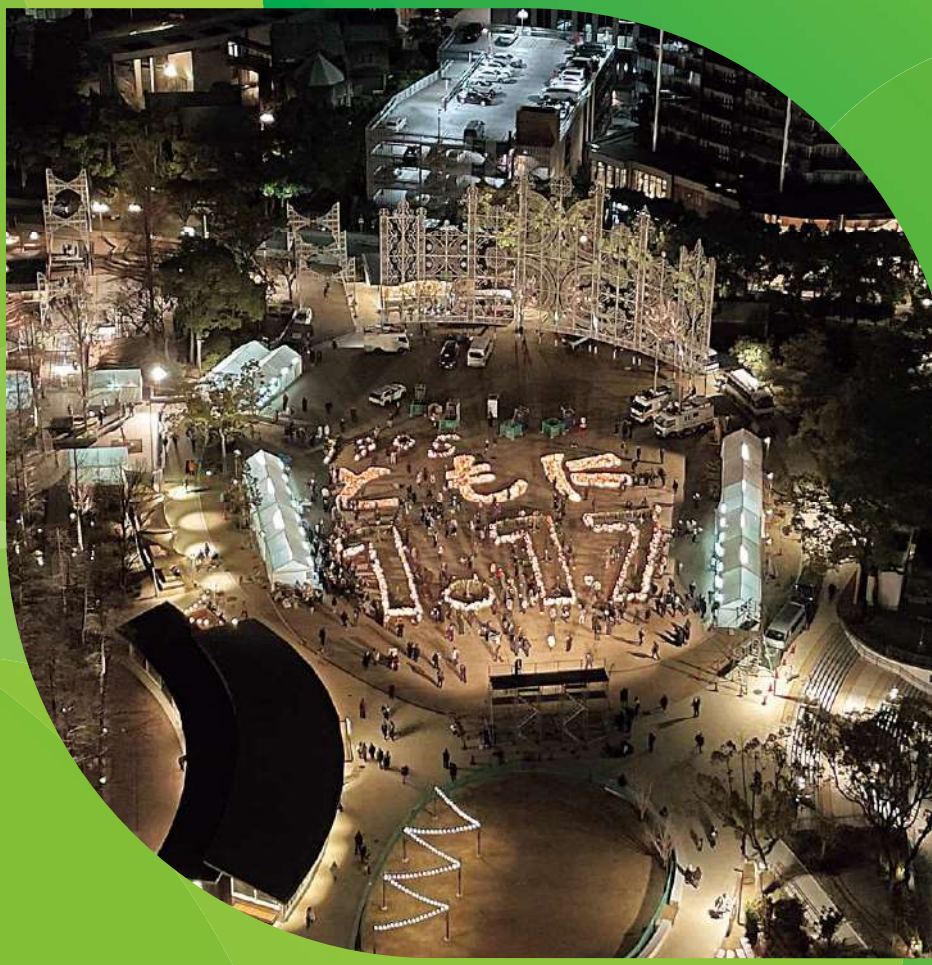
東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト 博学連携事業報告書

「被災地」からもう一度「ふるさと」へ

高校生と博物館が考えた地域の被災と再生、そして未来

Rediscover and Rebuild Our Hometown



はじめに

岩手県陸前高田市は東日本大震災被災地の中でももっとも多くの文化財が被災した自治体のひとつです。救出されたものにかぎってもその数は50万にせまるとされており、津波などで失われてしまったものもふくめるとその総数ははかりしれません。

2011年から現在にいたるまで、日本全国の関係機関が力を合わせ、津波による文化財の大規模被害という初めて直面する事態に立ち向かい、陸前高田市をはじめとする被災地の博物館や文化財の再生を後押ししてきました。

とりわけ自然災害による被災と、そこからの復旧・復興で、大きくその姿を変えた地域にとって、文化財は被災前と後の地域をつなぎとめるため、大変重要な役割を果たします。

そのような文化財や、地域の文化財を保存する役割を果たしている博物館が、再び同じような被害を受けることを防ぐため、わたしたちは博物館や文化財などの防災力を高めることを目指したプロジェクトを展開してきました。

日常生活の中では、文化財の大切さや、その防災の必要についてなかなか意識することはありません。特に学校の内外での活動におわれる学生の皆さんはなおさらだと思います。

そこでわたしたちは、東日本大震災被災地の高校生の皆さんとともに、自分がくらす地域の被災と再生、そして未来について、文化財という視点を取り入れながらともに考えてみる取り組みをはじめました。

岩手県立大槌高等学校の皆さんは、もうひとつの「大震災」被災地である兵庫県にくらす人たちを、岩手県立高田高等学校の皆さんは、学校が所蔵する文化財を救ってくれた専門家の方々をたずね、新しいネットワークを築きながら学びを深めていきました。

「文化財」と聞くと、わたしたちの生活とはかけはなれた、たいそうなものというイメージをいだいてしまいがちではないかと思いますが、そうではなくてわたしたちの日々のくらしやふるさとの歩みの結晶が文化財であり、だからこそ大切な「ふるさとのたからもの」としてそれらを守っていかなければならないということを、この報告書にまとめられた生徒の皆さんの取り組みの成果から、感じとっていただければ幸いです。

なお、少しでも広い年代の人たちに読んでもらうために、できるかぎりわかりやすい表現とし、ふりがなも多くもちいています。あらかじめご了承ください。

東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト
実行委員会長　髙橋　廣至

東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクトとは？

東日本大震災から10年以上がすぎる中で、風化（忘れられてしまうこと）を防ぎつつ、震災から学んだことをいかして岩手、そして東北の地から、全国の博物館や文化財の防災力を高めていくことを目指し、岩手県立博物館と全国の博物館や関係する団体が力を合わせて取り組んでいるプロジェクトです。くわしい活動の様子などを公開している専用ホームページ（右コード）もぜひご覧ください。

探究活動に取り組んだ学校の紹介

岩手県立大槌高等学校

東日本大震災で大きな津波被害をうけた岩手県大槌町にある普通科の高校です。

震災後に結成された「復興研究会」が10年以上かけて取り組んできた、変わりゆくまちの様子を写真で記録する定点観測は、2022年の防災功労者内閣総理大臣表彰を受けるなど高い評価を受けています。

また、地域の人々と積極的にかかわりながら魅力のある学校づくりをすすめるとともに、岩手県外の中学校からも入学することができる「はま留学」制度を取り入れており、大槌でしかできない学びを全国に向けて発信しています。

この事業では主に岩手県立博物館と連携し、町内外のフィールドワークや兵庫県立淡路高等学校との交流などに取り組みました。

岩手県立高田高等学校

高田高校がある岩手県陸前高田市は市街地が大津波で壊滅的な被害を受け、高校の校舎も全壊しました。

校内にかざられていた美術品（絵画）は、国によって行われた文化財レスキュー活動によって救出され、再建された新しい校舎にふたたびかざられています。

普通科と水産を学ぶ海洋システム科の２つの学科があり、津波にさらわれた海洋システム科の実習船「かもめ」が漂着したことをきっかけとして、アメリカ合衆国カリフォルニア州クレセントシティ市にあるデルノーテ高校との間で新しい交流が生まれています。

この事業をとおして陸前高田市立博物館に通いながら、ふるさとのたからものがどのように再生されたのか学んでいます。

災害遺構のかたち

しずかなかたりべ、災害遺構

現在では大きな災害がおこると、被害を受けた建物などを、できるかぎりそのままのすがたで保存して、災害を直接経験していない人にも、そのおそろしさや、教訓を伝えようとすることが多くみられるようになってきています。

身近なところでは、2008年岩手・宮城内陸地震で崩落した祭畤大橋が岩手県一関市内に保存されています。

東日本大震災が発生すると、大槌町でも、震災を象徴するような被害の状況を、やはりおなじような災害遺構として残したほうがよいのではないかという声があがりました。

民宿に乗り上げた観光船はまゆりなどはその代表的な例です。

2008年岩手・宮城内陸地震の災害遺構祭畤大橋

観光船が乗り上げた民宿跡（大槌町赤浜地区）

葛藤をのりこえて

災害遺構には公共の施設などがえらばれることが多くあります。そのため、被災した役場の旧庁舎についても災害遺構の候補となりました。

しかし、多くの方が犠牲になった場所でもあることから、保存すべきかどうかについては、大槌町にくらす人々の間でも意見がわかれました。

結果的に解体する方針がさだめられ、2019年に作業が実施されました。

いま、建物としての旧庁舎は残されていませんが、スマートフォンなどを使って、現在の景色に旧庁舎の映像をかさねあわせることができるAR（拡張現実）アプリが開発され、新しいスタイルの災害伝承がはじまっています。

解体前の旧大槌町役場庁舎

現在の旧大槌町役場庁舎跡地

第３の選択肢をさがして

旧役場庁舎をめぐる議論は、大槌町の災害遺構について大切なポイントですが、わたしは残すべきだったかどうかという２択をこえて、どのような形で災害を伝えることができるか、まちの中に残された痕跡をさがしてみました。右の写真にある石碑はその１つです。小鎚神社の鳥居のわきに倒れていて、震災時に大きな津波の力を受けて倒れてしまった石碑だとみられます。意識してみると、震災の痕跡は意外と身近にいくつも見つけることができるのだということに気づきました。

わたしたちの記憶をつないでいくために

阪神・淡路大震災被災地である神戸市長田区の双葉学舎では、震災前後の写真を比べることで震災の恐ろしさや復興の様子を伝えています。また、写真をドラマのセット作りなどに活かしたいという制作陣に貸し出しているそうです。他のメディアをとおして間接的に震災の記録を残しているという見方もできます。一方、淡路島の野島断層保存館では、地震の原因となった断層がそのまま保存されていることで、あらゆる世代がそこで起きたことを、具体的に分かりやすく学ぶことができます。だれもがいつでも、自分の意思で過去の災害を学べる場所の必要を強く感じました。

この調査を通して、災害遺構には、建物だけでなく、風景にとけこんでいるものや映像作品、ARなど様々なかたちがあるということを学びました。逆にいえば、あらゆるメディアを活用して、災害を伝えていく必要があるということなのでしょう。

過去の災害から学び、次の災害に備える。震災の影響をマイナスなものばかりにしないためにも、災害をありのままに伝える災害遺構というものがかかせません。大槌町にくらす者として、日常生活にとけこんでいる様々な遺構になりうるものに少しでも光を当てられる方法をさがし、実践していきます。

被災した姿をとどめている石碑とそのそばにある震災のモニュメント（大槌町小鎚神社）

震災伝承展示室のある大槌町文化交流センターのまわりに建て直された古い石碑にもよく見ると被災の跡があります

神戸市の定点観測写真の展示

そのまま保存されている断層でとぎれたあぜ道（野島断層保存館）

震災後に神戸市長田区の地域活性化のために設けられたモニュメント（神戸市長田区）

〈主な参考文献〉 日本経済新聞「大槌町旧役場庁舎の解体始まる　津波で28人犠牲」2019年１月19日
大槌町「大槌町復興レポート 令和２年４月１日現在」2020年

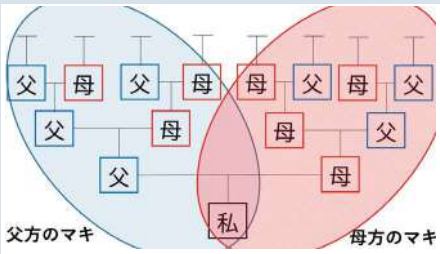
岩手県立大槌高等学校 × 博物館

「マキ」から考える災害とコミュニティ

わたしをとりまく「マキ」

「マキ」と聞いてあなたは何を思いうかべるでしょうか。わたしがくらす大槌町赤浜地区では、「マキ」とよばれる人間関係が現在もいきづいています。小学館の『日本国語大辞典』では「同族集団をいう」とシンプルに説明されていますが、父方、母方それぞれにマキがあり、親戚がそれに属していることをのぞき、いったいどこまでがマキなのか、いつからなんのために存在しているのかなど、マキの一員でありながら、わからないことの方が多くありました。

東日本大震災の後、地域コミュニティをいかに守っていくかが課題としてあげられるなか、「マキ」にその手がかりがあるのではないかと考え、その正体を探ってみました。



わたしをとりまくマキのイメージ図

《**マキとは**》わたしにとってのマキは、苗字を同じくする親戚のなかでも、主に冠婚葬祭などに集まる範囲の集団をさしますが、時代や地域によりそのあり方にはちがいがみられます。

大槌町赤浜地区

三日月神社

神社に伝わるマキの記憶

マキについて調べるなかで、父方の祖母のマキ（岡谷マキ）と地域の三日月神社が深く結びついているということを知り、神社をたずね、管理者の方からお話しをうかがいました。その結果、自分が属するマキについて、様々なお話しを聞くことができました。

聞き取り内容

きびしい年貢の取り立てに抗議し、打ち首になった人の息子が、つてのあった前川善兵衛さんをたよって赤浜へ来た。岡谷マキはその人以来約300年続いており、代々漁業と神社の運営をになっている。

少子化が進む現在では分家の数がへり、それによってマキも縮小している。

まつっているご神体は現在の茨城からもたらされたもの。御社地から譲り受けた。

明治の津波では当主をふくめ10名ちかくの方が亡くなった。その後の代にマキはおとろえた。

血がつながっていなくても、一緒に漁業をしていた人が同じ姓をもらい、マキの一員になることがあった。

分家がふえるにつれてマキの範囲が広がるとマキ中心の意識から地域中心の意識へ変わった。

東日本大震災の後、復興の過程でどこに移っていったかわからなくなる人もいた。親戚間の冠婚葬祭の知らせも以前にくらべると少なくなっている。

マキからみえる地域のあゆみ

大槌町は古くから漁業がさかんであり、江戸時代には前川善兵衛という有力者が生まれました。その前川家から支援をうけ、赤浜に移り住んだとされるのが、岡谷マキの祖でした。血縁集団と同時に、漁業で結ばれる職業集団という面を持ちながら発展していったようです。また、過去帳などを保存する神社を管理していたことも、岡谷マキの結束を強める要因になったことが想像されます。

分家がふえ、マキの範囲が広がることで地縁集団の意味合いをも持つようになったこと、職業が多様化したこと、大きな災害にみまわれたことなどをきっかけとして、コミュニティとしてのマキは次第におとろえていきました。

こうしたマキが持つ互助や共助の力は災害の時にも役立つものです。さらにそのあゆみは大槌という土地の歴史を凝縮した、形のない文化財の１つのようにも感じられます。しかし、東日本大震災の影響で、こうした昔ながらのコミュニティのあり方が変わることは避けられないでしょう。

災害とコミュニティ

ほかの災害被災地の事例をみると、淡路島では、消防団員が地域との強いつながりを生かし、阪神・淡路大震災の時にも行方不明者ゼロを実現できたそうです。また、インドネシアのアチェという地方では、インドネシアのなかでもイスラム教の教えが強くねづいていて、正しい防災の知識であっても宗教指導者の方が納得しなければ、間違いだとされてしまうそうです。大槌町では東日本大震災で消防団にも大きな犠牲がでてしまったこともふまえると、画一的なコミュニティ形成はむずかしく、地域の性格や今あるコミュニティのあり方を尊重しながら、災害時に互助や共助の力を適切に発揮できる地域を作ることが求められます。

一方、神戸では震災をしらない世代がSNSを用いてゆるやかなコミュニティをつくり、震災の伝承に取り組んでいるそうです。わたしたちも過去のコミュニティのあり方をよく理解したうえで、理想的なあたらしい大槌のコミュニティを創造していきます。

史跡として大切にされている前川家の墓地

大槌町の漁業を支える大槌湾

地元の高校生からアチェについて学ぶ

1.17希望の架け橋の皆さんとの交流

〈主な参考文献〉　大給近達「書評　大山彦一『南西諸島の家族制度の研究マキ・ハラの調査』」（『民俗學研究』27巻1号、1962年）

自衛隊と災害の関わりについて

災害派遣の歴史

大きな災害が起こると自衛隊が災害派遣されることは当たり前のようにも感じます。しかし、なぜそれを当たり前と感じるのかについて説明できる人はあまり多くないようにも思います。これからの防災について考えるためにも、まずは災害派遣の歴史を正しく理解する必要があるでしょう。

自衛隊の災害派遣は、1951年に西日本をおそった台風被害の救援活動（当時は警察予備隊とよばれていました）にはじまるとされています。それから半世紀以上にわたり、全国各地で活動を重ねてきました。

自衛隊が組織される前には、軍隊がその役割をはたしていました。明治時代（1896年）、昭和時代（1933年）に三陸を大津波がおそった時も、やはり陸軍と海軍が発災後間もない段階から犠牲者の捜索や生存者の救援のための活動を行っていたことが記録に残っています。

一般市民にはない装備や組織力を持った自衛隊は、東日本大震災における文化財の救援活動にも不可欠な存在でした。

災害派遣の実態

わたしたちの世代では震災当時の自衛隊の活動について記憶がない人も多いことから、実態を知るために岩手地方協力本部の方に協力をいただき、聞き取り調査をしました。

Q 東日本大震災当時、大槌ではどのような活動が行われたのですか？

A 基本的には他の被災地と同様の活動が行われましたが、大槌町に派遣された岩手駐屯地の隊員（第9高射特科大隊）は、3月というまだ寒い時期に、捜索で見つけた子供のご遺体が寒くないようにと自分のジャンバーにくるんで、丁寧にご遺体を搬送していたといいます。また、見つけたご家族の写真や子供のランドセルなどをきれいに洗って、ご家族が確認しやすいよう、十分な配慮に心掛けました。大槌町に派遣された隊員は、入隊したばかりの若い隊員であっても誰ひとり弱音をはかず、救援活動に励んでいたと、大槌町を担当した部隊の隊員から聞いております。

明治の三陸津波に突進する海兵
（『風俗画報臨時増刊 大海嘯被害録』より）

陸前高田市立博物館での大型資料救出支援

東日本大震災後に岩手駐屯地の部隊が参加した主な救援活動

2013年
- 盛岡市、雫石町の水害における人命救助活動

2016年
- 台風10号にともなう岩泉町での孤立者の救出・民生支援・瓦礫の除去など
- 熊本地震における民生支援

2017年
- 釜石林野火災消火活動

2018年
- 広島豪雨災害での民生支援

2019年
- 台風19号にともなう岩手県沿岸地域の民生支援・瓦礫の除去など

Q　心の復興に関する活動もあったのでしょうか？

A　自衛隊が避難所を回り、被害者のニーズへの対応や傾聴を実施しました。大槌町では安渡小学校において第9音楽隊（青森駐屯地）による慰問演奏会、大槌高校において東北方面音楽隊（仙台駐屯地）による慰問演奏会が行われるなど、積極的に被災者の心の復興のために取り組みました。

Q　①活動した隊員の方の心のケアや、②次なる災害にそなえた用意などはどのようにしているのですか？

A　①被災地での隊員の心のケアとして、『解除ミーティング』というものを1日の活動の終わりに行いました。グループのリーダーが部下隊員の心身の健康状態を確認し、その日の出来事を共有することで、ストレス蓄積の防止に努めました。また、現在も継続してメンタルヘルスチェックシートにより、ストレスの把握を実施しています。②自衛官は災害に備え、常に物心両面の準備をしています。自衛隊は救援活動の際に使用する人命救助システムという機材を扱う訓練をして、いざという時に備えています。また、長期の救援活動に耐えうる体力をつちかうために、長距離走による体力づくりや雪山における遭難者の捜索・救援活動に備えたスキー訓練を毎年行っています。その他、各市町村で毎年実施されている防災訓練に参加し、各自治体との協力態勢を構築しています。

これからも続く災害派遣

令和6年の元旦に能登半島地震が発生し、石川県をはじめとする北陸地方に大きな被害をもたらしました。道路が寸断されるなか、孤立する避難所に徒歩で救援物資を運ぶすがた、炊き出しやお風呂の提供など、わたしたちはふたたび自衛隊の活躍を目の当たりにしました。

東日本大震災を機に、自衛隊の災害派遣の重要性はいっそう社会で広くみとめられるようになってきています。しかし、10年以上たってもメンタルヘルスチェックが続けられているというように、わたしたちはその支援を当然のものととらえるのではなく、被災した人も、それを救う人も、ともに同じ災害に向き合う人間であるということを忘れてはいけません。

阪神・淡路大震災を経験した淡路高校では毎年発災の日に自衛隊の皆さんと防災について学んでいます。岩手県でも令和5年度には22の学校で同じような自衛隊の方をまねいての学習が行われたそうです。

いざという時にだけ頼るのではなく、ともに次に備えること。そのような姿勢が必要だと考えています。

大槌町立吉里吉里小学校にて
出典：いわて震災津波アーカイブ
提供者：陸上自衛隊青森駐屯地

お話伺い隊の活動
出典：いわて震災津波アーカイブ
提供者：陸上自衛隊青森駐屯地

阪神・淡路大震災発生の日に全校で行う淡路高校の避難訓練

自衛隊とともに行う淡路高校の防災学習

〈主な参考文献〉村上友章「自衛隊の災害派遣の史的展開」（『国際安全保障』第41巻第2号、2013年）
遠野文化研究センター『復刻版　明治29年「風俗画報」臨時増刊 大海嘯被害録』（荒蝦夷、2012年）

地域の過去と未来をつなぐまつり

大槌がもっとも熱くなる日

どのような地域にも、特別な日やイベントがあるものですが、大槌まつりの日は一年のなかでも大槌が一番活気づく日の１つだと思います。

祭りは神社に奉納されている御神輿が町内をねり歩くことが中心となり、さまざまな郷土芸能がそれをいろどります。

進学や就職などで一度大槌をはなれても、この日にあわせてふるさとに帰るという人も多く、わたしたちとふるさとを強くむすびつけているものであるといえます。

東日本大震災が起こった2011年にも行われ、それ以降、まちの復興とともに祭りも一歩ずつ本来のすがたをとりもどしてきました。

江戸時代から続くいのり

大槌まつりの拠点のひとつである小鎚神社には、江戸時代（1726年）につくられたという御神輿が伝わっています。宮司さんのお話しからは、地域と祭りの深いかかわり、そして地域の力が震災でゆらいだ大槌まつりをつなぎとめたことがわかります。

聞き取り内容

昭和の頃までは社人とよばれる地域の住民（漁師が多かった）が毎年交代でおまつりの運営を担当する勤番制度というものがあった。現在その制度はなくなり、観光交流協会をはじめとする様々な関係者から構成される実行委員会が主催するようになっているが、地域の人たちのおまつりに対する思いは強く、東日本大震災が発生した2011年にも、地域のなかから自らまつりに必要な物や人を用意する方があらわれた。小鎚神社で神輿を出すという決断をしたところ、他の郷土芸能の団体から自分たちも出させてほしいという声があがり、犠牲者の鎮魂や被災者支援の意味をこめてまつりが開催された。

2023年の大槌まつり　小鎚川の川渡り

2012年大槌まつり

出典：いわて震災津波アーカイブ

提供者：臼澤鹿子踊保存会

江戸時代の年号を持つ神輿が伝わる小鎚神社

ふるさとの復興と大槌まつり

続いて大槌町の観光交流協会に問い合わせ、震災後のまつりの移り変わりについて調査をしました。

提供いただいた資料をみると、御神輿の順路は、大槌町の復興そのものをよく物語っていました。

震災後まもないころは仮設住宅をまわっていたものが、やがて本格的に整備された公営住宅へ、そして道路がととのえられていくにつれ、次第にかつてのまちの中心部へとのびていく順路。

2023年には震災後初めてとなる大槌川の川渡りもおこなわれました。

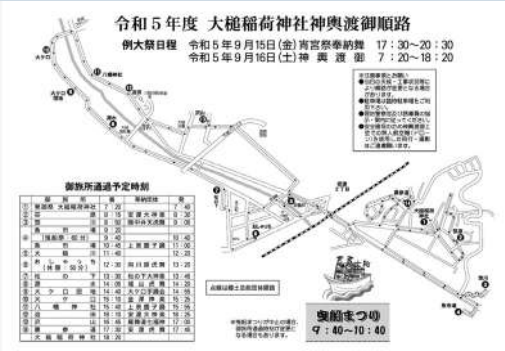
まちとともに、そこで行われるまつりもまた生きていることを感じさせられます。

さらに100年先の未来へ

岩手県奥州市の黒石寺で1000年続いてきたという蘇民祭が2024年を最後にとだえるというショッキングなニュースがありました。大槌でも少子高齢化や人口の減少が進むなかで、最低でも50人が必要だという御神輿のかつぎ手や郷土芸能の継承者をいかに確保していくかが課題となります。

東日本大震災後、大槌まつりは地域のなかの人々だけではなく、ボランティアなどで町外から訪れた人と大槌をむすびつける役割をはたしたといいます。さらに、たえず行われてきた大槌まつりは震災の前と後の歴史や文化をつなぐ役割もはたします。

自分たちが心から楽しむことはもちろんですが、同時にまつりが持つそのような大切な役割について理解し、魅力を発信していくことで、大好きなまつりを次の世代へとつないでいきたいです。



大槌まつりにおける神輿の順路の変化
提供：大槌町観光交流協会

〈主な参考文献〉 岩手日報「「蘇民祭」閉幕に落胆と継続を願う声」2023年12月６日
「大槌町震災アーカイブ つむぎ」https://archive.town.otsuchi.iwate.jp/（2024年２月１日最終閲覧）

わき水がいろどるまち、大槌

大槌のみなもと

大槌といえば、多くの人は海をイメージすると思いますが、この地域の自然を特徴づけるものの１つにわき水があげられます。

東日本大震災の前から大槌町の中心部には、かぎられたエリアにこれほど集中している場所はほかに例がないといわれるほど多くのわき水がみられ、生活にとけこんでいました。

人々のいとなみにかかせない水のまわりには自然と人が集まり、まちが生まれていきます。ゆたかなわき水はわたしたちが住む大槌町のルーツともいえるでしょう。

いまでは三陸ジオパークのなかのジオサイトの１つにも数えられるわき水は、大槌町がほこる自然遺産といえます。

大震災とわき水

東日本大震災後におこなわれた調査で、町方地区とよばれる大槌町の中心部には、約170か所のわき水の存在が確認されています。

水の町である大槌町ではわき水が、飲用、洗濯など、生活のなかで大きな役割を果たし、人々に愛されていました。かつては産湯としても当たり前のように使われたわき水に生まれたときからしたしみ、まわりの住民が共同でそれを管理したり、利用者たちが文字通りの「井戸端会議」に花を咲かせたりと、わき水の存在はコミュニティ形成にも一役買っていました。

その恩恵を受けるのは人間だけではなく、わき出る水が森や川、自然の恵みを育んできました。

しかし震災は、こうしたわき水に関する環境にも大きな影響を与えました。復興事業でおこなわれた『盛土』により、封鎖されたわき水は約60か所にものぼるとされます。

文化財にも指定されたわき水による清流

清流に生きる絶滅危惧種の淡水型イトヨ
提供：大槌町観光交流協会

わき水と、その後ろに見える家が建つ地面との高低差が盛土の高さを物語る

復興とわき水

震災後、町内では道が新しく作られたり、堤防が建てられたりと以前とは大きくすがたが変わっています。そのなかでわき水は『町と震災の記憶』の伝承という役割もになっているのではないかと考えました。まず注目されるのが『公園のわき水』です。町方地区の公園の多くにはわき水が流れていますが、周囲が約2メートルの盛土が行われるなか、わき水のある公園は盛土前のすがたで残されています。

大槌町には、当時のことをそのまま伝えられるものは多くありません。そういうものに“触れたくない”“思い出したくない”と感じる人もいます。そのようななかで、震災後もさまざまなかたちに整備されたわき水がある空間を“綺麗”、“心地よい”と感じてもらうとともに、その歴史や意味を伝えることができれば、わき水は災害の伝承、そして心の復興にも活用できるのではないでしょうか。

わき水がひめた可能性

東日本大震災からの復興が進む大槌町では、さまざまなかたちでわき水を活用しようといううごきが見られます。わき水を使ったお酒やおそばから、大きなスーパー銭湯まで、ゆたかなわき水を使っていることがアピールポイントになった商品やサービスがうみだされてきました。

さらに、阪神・淡路大震災を経験した兵庫県神戸市でも、災害時にも役に立つ地元のわき水の価値が見直されているほか、今後の災害にそなえて、いざという時に地域の人たちに使ってもらえる井戸やわき水をまとめた「もしもの時の災害時協力井戸・湧水マップ」を作成したという事例もあります（神奈川県秦野市）。

大槌がほこる大切な財産を、今後最大限活用していくためにも、まずは大槌に住むわたしたちがそのありがたさをしっかりと知ることが必要なのだと考えています。

日常にうるおいをあたえてくれる公園のわき水

わき水を活用して震災後にたてられたスーパー銭湯

わき水を活用したあたらしい商品開発
提供：大槌町観光交流協会

神戸市内に整備されたわき水の販売所

〈主な参考文献〉 福島秀哉・浅井淳平「湧水と生活史に関する記述ー-岩手県上閉伊郡大槌町町方を対象としてー」
（『景観・デザイン研究講演集』No.9、2013年）

最大級の文化財被災地　陸前高田

東北最古の公立博物館の被災

陸前高田市立博物館は、1959年に開館した東北地方で最も長い歴史を持つ公立博物館です。

原始・古代から現在にいたるまでの生活のうつりかわりや、産業、文化などの流れを総合的に展示する、地域にねざした総合博物館です。収蔵資料の99.9％が寄贈されたもので、市民の協力により充実したコレクションが形成されていきました。

半世紀以上にわたり守り伝えてきた陸前高田のたからものは、2011年3月11日の大津波に博物館ごとのみこまれました。行方不明になった資料は約10万点。残ったものもこわれたり、海水のためサビやカビが発生するなど大きな被害をうけていました。

東日本大震災以前の陸前高田市立博物館

博物館の被災状況

文化財レスキューのはじまり

傷ついたふるさとのたからものをなんとか守ってほしい。そのような市民の思いに後押しされて、岩手県の文化財レスキュー活動は始まりました。

瓦礫のつまった博物館から救出された資料は、閉校になった小学校や岩手県立博物館などの安全な場所に移され、応急処置がほどこされました。

津波で被災した資料は、そのままにすると、海水の中の塩分によりさらにいたんでしまうので、これをとりのぞく必要があります。しかし、そのような作業は世界的にも前例がなく、はじめのうちは困難の連続でした。

なんとか考えだされた方法により処置が行われた資料は、しばらく経過を観察したあと、ようやく本格的な修理に入っていきます。

博物館の資料救出活動

手さぐりで行われた安定化処理

よみがえる博物館

2022年11月、陸前高田市に博物館が帰ってきました。資料のほとんどが津波で大きな被害を受けたものの、全国の専門家からの支援を受けてよみがえり、ふたたび博物館で出会えるようになりました。

ただ元にもどっただけではありません。2023年3月には津波を乗りこえた「陸前高田の漁撈用具」が、国の重要有形民俗文化財に指定されました。新しい博物館ではその一部の使い方が再現展示されていて、「はむどう」や「つぶかご」といった、名前を見ただけではよくわからない資料についても、こどもから大人まで、手でふれながら、大きさやしくみを学ぶことができます。

数えきれないほどの標本や、過去の人たちが使ったものなど、ふるさとのすべてがつまっているように思えますが、江戸時代より前の歴史など、まだまだよくわかっていないことも少なくないそうです。いつか自分がその余白をうめてみたい。そんなことを考えさせられるすてきな場所が、わたしたちのふるさとに帰ってきました。

ふるさとのたからもの

東京上野にある国立科学博物館には、陸前高田市のある気仙地方にまつわる資料が何点も展示されています。江戸時代に落下した気仙隕石の実物からは、陸前高田市立博物館の展示から想像していた爆音や地鳴りなどがよりリアルに伝わってきました。

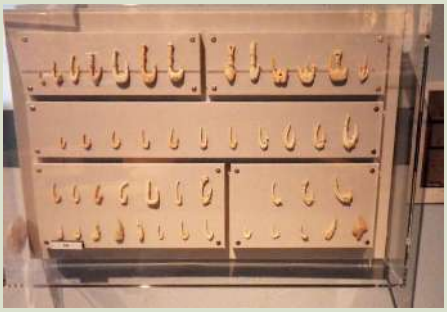
日本を代表する博物館で気仙地方産の品々に出会ったことで、日本の地質学や考古学、天文学の流れのなかに、しっかりわたしたちのふるさとの歴史も刻み込まれていることを目の当たりにした気がします。

文化財はわたしたち人類の長い歴史のなかで生まれ、こんにちの世代に伝えられてきた大事な財産であるからこそ、これからも受けついでいくためにわたしたち自身ができることを考え、適切な保存と活用をはかることがとても重要だと身にしみて感じました。

陸前高田のまちにふたたびともった博物館のあかり

陸前高田の漁撈用具

日本に落下した最大の隕石、気仙隕石



何千年も前から人が海と生きてきたことの証

〈主な参考文献〉国立歴史民俗博物館編『被災地の博物館に聞く　東日本大震災と歴史・文化資料』（吉川弘文館、2012年）

岩手県立高田高等学校 × 博物館

大津波をのりこえたツチクジラの「つっちぃ」

「つっちぃ」がやってきた

「つっちぃ」は、全長9.7mの、世界で唯一のツチクジラ［♀］のはく製です。1954年に東京で国際捕鯨委員会が開催された際に、千葉県白浜で捕獲されたツチクジラをはく製にしたものです。委員会の終了後、国立科学博物館の中央ホールにしばらく展示されていましたが、1970年に開校30周年をむかえた岩手県立広田水産高等学校に寄贈され、大切に保管されて来ました。同校OBの大工さんの協力で、スギを積むトラックをチャーターして一昼夜かけて東京からはこばれたそうです。「つっちぃ」と命名したのは、当時の高校生でした。その後、陸前高田市に寄贈されたつっちぃは、1994年7月24日に開館した「海と貝のミュージアム」に展示され、市民に愛されてきました。

大津波にたえた「つっちぃ」

東日本大震災で陸前高田市を襲った大津波は、海と貝のミュージアムのとがった２つの屋根を残し、建物全体を飲み込みました。一度押しよせた後、引いていく波がはこんだ住宅など、さまざまなものがエントランスに押し込まれたような状態でした。

館内は、流れ込んだものと貝の標本がごちゃまぜになっていて、展示ケースの１つは天井につきささっていました。中には、大きなケースや棚ごと流されてしまったものもありました。なんとか館内にとどまっていた「つっちぃ」も、よくみると表面をおおっていた素材がはがれたり、左のしっぽの先が壁にぶつかり折れたりしていました。標本の内部には大量の海水が流れ込んだようです。それでもつっちぃはその流線形の体で、千年に一度の津波をなんとか泳ぎ切りました。

東日本大震災以前の海と貝のミュージアム

ミュージアムのシンボルだったつっちぃ

海と貝のミュージアムの被災状況

傷つきながらも津波にたえたつっちぃ

「つっちぃ」を救え！

「つっちぃ」は、被災した資料のなかで最も大きな標本でした。海水を吸ったため、1トン近くの重さになっていたようです。どうやって救出すればいいのか分からず途方にくれていましたが、国立科学博物館の真鍋真先生にご相談したところ、同館の山田格先生、田島木綿子先生に情報が伝わり、「つっちぃ」救出大作戦が動き出しました。まず、博物館の文化財レスキューに関わっていただいた自衛隊の部隊に再度協力をお願いしました。はじめに腹部に小さな穴をあけ、中に入った海水を出しました。それから、つっていたワイヤーを外し、別に用意した鉄パイプの枠につっちぃを移し、そのまま約1か月を過ごし、大型トラックなどの準備をととのえ、2011年6月29日に国立科学博物館筑波研究施設へ向けて旅立ちました。そしてそこでふたたび博物館の資料になるための処置がおこなわれたのです。

自衛隊の協力も得て実現した救出作業

修復作業が進むつっちぃ

多くの人の想いを乗せて

陸前高田市立博物館で、そして国立科学博物館でうかがったつっちぃ再生の物語から、わたしたちのまちの文化財は想像もできないほど多くの人が関わるなかで、今わたしたちの目の前にあるということを学びました。大変な状況のなかで、なんとかふるさとのたからを守ろうとした人たちのすがたは、まるで本能につき動かされていたようにも感じます。それは人にとって文化財がなくてはならないことの証拠なのでしょう。

はく製を作った人、ふるさとのたからとして受けいれた人、それを大きな災害から守った人。震災すら1つのきっかけとして、より多くの人と出会いながら、つっちぃの物語は未来へとつながれていきます。

その一部に立ち会ったわたしが感じたのは、なによりつっちぃが帰ってきてくれてうれしいということ。文化財という言葉を知らない子どもたちも、つっちぃを大切にすることはできる。友達のように「つっちぃ」とよぶところから、文化財を大切にする心が生まれていくのではないかと思います。

国立科学博物館での聞き取り調査

新しい博物館で未来へと泳ぎ続けています

〈主な参考文献〉 津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会『安定化処理』(2014年)
朝日新聞「ツッチー救出作戦始まる」2011年5月30日

岩手県立高田高等学校 × 博物館

わたしたちが守る学校のたからもの

学校に伝わる文化財の被災

東日本大震災で校舎が全壊した高田高校では、校舎内などに展示、保管されていた13の美術品が国の文化財レスキュー事業の対象になりました。学校所蔵の文化財が国のレスキュー事業の対象となった例は全国的にも珍しいといえます。

救出された文化財のうちの１つである、畠山孝一さんが描いた「三陸わが譜」という作品が、再建された高田高校に飾られています。おとずれた人が必ず目にする位置にあるこの作品で描かれているのは、美しくも力強い岩々が広がり連なる雄大なふるさとの風景です。探究活動を通して、被災と再生のあゆみを知ったいま、あらためて向き合ってみると、まるでわたしたちの校舎を見守ってくれているようにも感じます。

高田高校の被災状況

学校所蔵文化財の被災

美術品再生のあゆみ

被災した文化財は安全な場所へ避難させるだけでなく、続いて「安定化処理」とよばれる作業が必要になります。被災により進むさまざまな劣化を止め、できるだけ被災する前のすがたに戻すためにまず行われる作業です。油絵については、泥などの汚れのクリーニングや、剥落止めのにかわ水溶液の注入など、気が遠くなるほど神経を使う細かい作業が続きます。

さらに、こうした処置が終わって、一見元のすがたに戻ったようでも、海水により作品にふくまれた塩分は完全に抜ききることはできていません。今後どのような影響がでるか、今ははっきりわからないのです。もしかしたらある日突然絵にヒビが…!! なんてこともあるかもしれません。そのため、修復が終わった現在も、定期的に絵の状態をチェックする「経過観察」が必要になります。

表面のクリーニング

絵の具が失われた部分の処置

文化財再生の現場で

わたしたちは経過観察の方法や文化財の修復に関する基本的な考え方を学ぶため、ふるさとの文化財修復の現場となった東京藝術大学を訪問しました。

実際に高田高校の絵画の修復を手がけていただいた土屋裕子先生からは、文化財を保存する上での温度・湿度管理の大切さや方法、修復する際に重視しなければならない「可逆性」、そしてオリジナル性について教わりました。

同時に、母国の文化財修復の技術を身につけるために学んでいる留学生の方々の姿が強く印象に残りました。自分の学校の文化財を守るため、はたして自分が何をしてきたのか、何ができるのか、考えずにはいられませんでした。

わたしたちが守る文化財

文化財は、ふるさとの歴史を物語るものであり、そこに生きたかぞえきれない人たちの間で、こんにちまで受けつがれてきた大切なたからものです。文化財そのものはもちろん、それをつないできた人々の意志もこれから何十年、何百年と受けつがれていかなければなりません。高田高校の絵画も、ただ悲しい震災から救われたものとして残すのではなく、世界的にも前例が少ないという文化財の津波被害という経験をのりこえていくための貴重なサンプルとして役立てられるべきではないでしょうか。

わたしたちに今できることは、学校での保管場所の整理整頓や温度・湿度の管理、これらをこまめにおこなうことです。わたしたちは文化財修復のプロではありませんが、少なくとも「見守る」ことはできます。そして文化財を通して震災と向き合うことで、文化財ごとわたしたちのふるさとを大切にしていかなければならないという意識を持ち続けることができます。

わたしたちのふるさとに起こったことを忘れない。多くの方々の想いと願いを伝えたい。そんなわたしたちの思いとともに、たからものを後輩たちにたくします。

東京藝術大学大学院土屋研究室訪問

温湿度調査に使う毛髪計

他校の美術部の生徒も参加して高田高校で行われた土屋先生の特別講座

未来に向かう学校のたからもの

〈主な参考文献〉 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会編
『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会　平成23年度活動報告書』(2012年)

おわりに

人々が守り伝えてきたたくさんのたからもの。
そこには物語があります。
物語には心があります。
よみがえる博物館がそれを未来に伝え続けます。

よみがえった陸前高田市立博物館ではこのようなメッセージがおとずれた人になげかけられています。

大きな災害からの復興のなかで、その姿を変えたまちは、たとえるならば、新しくてとてもきれいだけど、まだからっぽの「いれもの」です。

そこへ、まちを輝かせるようないのちの火を、ふたたび消えることがないようしっかりとともしていくのが、災害後をいきるわたしたちであり、そんなわたしたちが進むべき道にまよった時に、それをさし示してくれるのが文化財なのではないかと思います。

日々のくらしの中で、わたしたちが何気なくくらしているまちを、地球の上で、ただここにしかない特別なふるさととして、いろどってくれているもの、こと、ひと、こころ、いとなみ。自分をとりまくすべてのもののありがたさを見つめなおしてみることが、大切な文化財を未来へつなぐための大きな一歩になると信じています。

次はあなたの話を聞かせてください。
あなたのふるさとのたからものは何ですか。

東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト　博学連携事業報告書

「被災地」からもう一度「ふるさと」へ
ー高校生と博物館が考えた地域の被災と再生、そして未来ー

発　行　者　東北発 博物館・文化財等防災力
向上プロジェクト実行委員会
編集責任者　岩手県立博物館　専門学芸調査員　目時和哉
アドバイザー　大槌高等学校：早稲田大学文学学術院 講師（任期付）　野坂真
高田高等学校：東京藝術大学大学院美術研究科 教授　土屋裕子
印　刷　者　川口印刷工業株式会社
発　行　日　2024年２月16日

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

本報告書は、文化庁による令和５年度Innovate MUSEUM事業の助成を受けて作成されました。